

# 絵を見る経験について

## — R・ウォルハイムとK・L・ウォルトンの論争を手がかりに —

清塚 邦彦

### 1 はじめに

さしあたり抽象画の類を度外視して、何かの絵という言い方がもっとすんなりとあてはまるいわゆる具象画を念頭におくならば、絵を見る知覚経験の持つきわだった特色は、それが、カンヴァスや紙の平らな表面を見る経験でありながら、同時に人物や静物や風景といったさまざまな事物の姿を見る経験でもあるという特異な二面性にあるとすることができる。当然ながら、絵の記号作用をめぐる理論的な究明は、絵の知覚経験が呈するこの二面性についての説明を欠かすことはできない。本稿では、この点についての理解を深める手がかりとして、絵の描写機能に関する代表的な論客として知られるR・ウォルハイムとK・L・ウォルトンのあいだの論争を取り上げ、両者のあいだの争点の確認と論争の帰趨について考えてみることにしたい。

### 2 ウォルハイムの場合

絵による描写・再現 (pictorial representation) の問題に関するウォルハイムの理論が一つの動機としていたのは、美術史家にして美術理論家でもある E・H・ゴンブリッチがその理論面での名著『芸術と幻影』のなかで提示した理論への批判である。ゴンブリッチ理論がじつに多様な考察からなる混成体であることは広く知られているが、ここではそのもっとも基本的な論点と見なされてきた着想に触れておきたい。それは『芸術と幻影』の序論において、有名なウサギ＝アヒルの図を例に解説されている<sup>\*1</sup>。この種の反転図形を見る場合、われわれの知覚は、あるときはある図柄の知覚でありながら、別の時には別の図柄の知覚というふうに、知覚内容が絶えず反転する。そしてゴンブリッチは、こうした事情がじつは絵による描写・再現 (representation) 全般の持つ基本特性だと主張するのである。

たとえばいくらか粗めの点から構成された点描画を考えてみよう。それを至近距離から見ているあいだは、われわれは絵の表面上にいかなるものの姿を見ることもできない。それはただ平面上の点の配列である。しかし、ある距離まで離れたところで、われわれは突然事物の姿を眼にする。そして、いったんそこに事物の姿が見えると、こんどは平面上のたんなる点の配列の方が視界から消失する。

同じ事情の好例としてゴンブリッチがあげる<sup>\*2</sup>のはベラスケスの作品である。彼はケネス・クラークの次のようなコメントに触れている。

---

\*1 Gombrich(1960), p.5.

\*2 Ibid., p.6.

『侍女たち』を見る人は、だれもがじきに、この絵がどんなふうに描かれたのかを知りたくなる。……私はよく、幻影が完成された姿を呈するかぎり最も近い位置から出発して、しだいに眼を画面に近づけてゆき、ついに突然、それまでは手やりボンやビロード片であったものが、美しい筆致の集積へと溶けさってゆくのを体験した。こうした変形が起こる瞬間を捉えることができたなら何かを学ぶことができるのではないか、と私は考えたのだが、それは目覚めと眠りのはざまの瞬間と同じくらいに捉えどころのないものであることがわかった。<sup>\*1</sup>

こうした所見をふまえて、ゴンブリッチは、絵を平面上の線や色の羅列として見る知覚経験と、そこにさまざまな事物の姿を見る知覚経験とのあいだの関係を、さきほどのウサギ＝アヒルの図の場合のウサギの知覚とアヒルの知覚の関係になぞらえる。どちらの場合にも、両方の知覚が共存することはありません、つねに一方の姿しか見ることができない。ゴンブリッチの言い方では、われわれはこうした視覚的「多義性それ自体を見ることはない」のであり、ただ「ひとつの解釈から別の解釈への切り替えを体験し、どの解釈も等しくそのイメージに適合すると実感することで、われわれは初めて多義性に気づく」のだという。<sup>\*2</sup>そして、このように両立しない二つの図柄についての知覚経験が随時反転するという事情は、いわゆる反転図形の場合だけでなく、描写・再現の性格を持つ絵画全般の特質だというのがゴンブリッチの見解である。ウサギ＝アヒルの図がわれわれに「ウサギか、アヒルか、どちらか？」という問いを投げかけているとすれば、一般に絵の知覚は、「平らな表面か、事物の姿か、どちらか？」、というわけである。

しかし、絵を知覚する経験をこのように平らな表面の知覚と事物の知覚との交代現象と捉えるような分析は、はたして実態にあっているのだろうか。

もしもゴンブリッチの言い分が正しければ、われわれが絵のもとに事物の姿を見ているときには、われわれはそれがたんに平面上の線や点や色の羅列であることを認識しておらず、視覚的な幻影を見ていることになる。例えば人物画を見る人は、そこに人物の姿を見ているかぎり、自分はいま人物を見ていると思っているのであり、絵を見ていることは自覚していないという理屈になる。しかしはたして、絵を絵として（つまり何かを描いたものとして）見ている人は、それが絵であることを認識していないのだろうか。美術館で絵を見る人々は集団的に視覚の錯誤を犯しているのだろうか。

ウォルハイムの理論は、こうした疑問に否と答えた上で代案を示す試みとしてまずは位置づけることができる。ウォルハイムに言わせれば、絵を見る人は、その描写内容を理解しているさなかにあっても、自分が見ているものが実物ではなく絵であることを承知している。絵を見る経験には、つねに同時に、それが実物ならぬ画材の知覚経験だという自覚が不可分の要素として含まれている。絵の知覚経験は、ゴンブリッチが考えたような、表面の知覚と事物の知覚との絶えざる交代現象ではなく、むしろ両者が渾然一体となって共

---

\*1 Clark (1960), pp.36-37.

\*2 Gombrich (1960), p.249. cf. pp.236, 259

存する現象として理解するのが適切だ、というのがウォルハイムの見解である。さきほどのゴンブリッチの言い方に対応づければ、絵の知覚とはまさに平らな表面でありかつ事物であるという視覚的な多義性それ自体を見ることなのだということになる。

こうした立場を強調して、ウォルハイムはある箇所<sup>\*1</sup>で、いわゆるだまし絵 (trompe l'oeil) は絵で絵ではない (そこには representation の働きはない) と極論している。それは控えめに言っても強引な主張だが、しかし、だまし絵がそのだまし絵としての狙いを達成しているあいだ、受け手の側はそこに絵を見てはいないという論点は、それはそれで正論でもある。

『芸術としての絵画』のウォルハイムは、絵の知覚において共存している平面の知覚と事物の知覚とのあいだのつながりの緊密さをさらに強調して、両者は偶然的に共存している二つの経験ではなく、むしろ一つの経験の二つの側面<sup>\*2</sup>なのだと述べている。そこでの言い方では、絵が紙やカンヴァスの平らな表面として見られているという側面は、絵の知覚の「配置的 (configurational)」側面と呼ばれ、他方、絵のもとにさまざまな事物の姿が見られるという側面が「再認的 (recognitional)」側面<sup>\*3</sup>と呼ばれる。そして、こうした二面性を持った知覚経験が、「～の中に見る (seeing-in)」<sup>\*4</sup>とでも呼ぶべき独自の知覚様式であることが力説されることになる。

以上にウォルハイム理論の一つの主要な筋道をたどってきたが、もちろんまだ話は終わりではない。絵の知覚がウォルハイム流の「～の中に見る」経験を重要な要素としていることはまちがいないとしても、そのことの指摘だけではまだ、絵の知覚の説明として十分ではない。以下では、さらに何が不足しているかを二つの疑問に沿って補足してみたい。

### 3 二つの疑問

二つの疑問と呼んだものの一つは、ウォルハイムが指摘する二面的な知覚の働きが、じつは具象画の場合だけでなく、さまざまな場面に見いだされるという事情と関わっている。例えば空の雲にヒツジの姿を見る人や、岩壁の模様<sup>1</sup>に一定の風景の姿を見る人は、絵を見る場合と類比的な二面的な知覚を体験している。しかし、だからといって空の雲や岩壁が何かを再現・描写 (represent) していると言えるのかどうか。素朴な語感に即して考えるかぎり、答えは否であるように思われる。

ウォルハイムはこうした観察を素直に受け入れ、再現・表象の働きの分析には、二面的な知覚に加えてもう一つの要素が不可欠であることを指摘する。ウォルハイムはそれを「正

---

\*1 Wollheim (1988), p.62.

\*2 Ibid., pp.46-47. cf. Wollheim (1986), p.46f.

\*3 Wollheim (1988), p.73

\*4 ウォルハイムは当初、「の中に見る」ではなく、ウィトゲンシュタインのアスペクト知覚論を念頭に置きつつ「として見る seeing as」という言い方をしていた。それが後に「の中に見る」というふう<sup>2</sup>に捉え直された経緯については Wollheim (1980b) を参照のこと。

しさの尺度 (standard of correctness)」と呼んでいる。<sup>\*1</sup>それは、事物が他のさまざまな事物の姿を呈するという現象に接したときに、それを特にどんな事物の姿として受け取るのが「正しい」かを定める基準にあたる。人が描いた絵の場合には、あまりうまくない絵の場合でも、われわれは表題その他の文脈情報に照らして、それをある特定の人物や事物の絵として受け取る。しかし、空の雲や岩壁の模様の場合には、われわれはそこにさまざまな事物の姿を見ることはあっても、雲や岩壁が何かを再現・描写しているとは思わない。なぜなら、雲や岩壁には、そこに何の姿を見るのが正しいかを定める文脈情報が伴っていないからである。そして、この種の文脈情報の最終的な由来としてウォルハイムが指摘するのは、作者が何を再現・描写しようとしていたか、という意図についての考察である。絵による描写は、ウォルハイム理論では、絵それ自体の見え方の問題であると同時に、作者の意図の問題でもある。

このあたりのウォルハイムの議論は、作品解釈における作者の意図の位置づけをめぐる美学・芸術学や批評の分野で交わされてきた複雑な論議の一翼を占めるものだが、今回はその是非の検討には踏み込まない。今回の検討課題としたいのはもう一つの疑問点の方である。それは、ウォルハイムの説明のなかで引き合いに出される二面的な知覚の本性に関わる。たしかにウォルハイムが指摘するような視覚経験が現に存在することはまちがいないように思われるが、しかし、はたしてそれは、正確にはどのような経験なのか。絵の中にさまざまな事物の姿を見るとは、どういうことなのか。

じつはウォルハイムは、この点についてはほとんど踏み込んだ考察を行っていない。彼は、二面的な知覚の能力がおそらく生物学的裏付けを持つにちがいないことを指摘しながらも、その本性についてさらに踏み込むことはしていない。<sup>\*2</sup>そして、ウォルハイムが未説明のままに残した二面的な知覚の本性をどう説明するかという点は、ウォルハイム以後の理論家に残された重要な課題の一つとみなされてきた。以下では、この課題に対する一つの有効な答案として K・L・ウォルトンの理論を取り上げ、その是非をめぐるウォルハイムとのあいだのやり取りの帰趨について考える。

#### 4 ウォルトンのごっこ遊び理論

二面的な知覚の本性に関するウォルトンの説明は、再現・描写の働き全般を子供のごっこ遊びからの発展形態として位置づけるいわゆるごっこ遊び理論に基づくものである。<sup>\*3</sup>

たとえば積み木を積み重ねる行為は、子供の遊びの文脈では、家を立てる行為という意味をもつ。また、積み木を手で押して床の上を移動させる行為は、同じく子供の遊びの文脈では、救急車を走らせる（あるいは運転する）行為という意味をもつかもしれない。どちらの場合にも、現実に行われている行為が、現実には起こっていないある架空の出来事（家を建てる、救急車を走らせる）であるかのように想像されている。そして、こうした

---

\*1 Ibid., p.48ff.

\*2 Ibid., p.54.

\*3 本節の論述は Walton (1992) にもとづく。その背景として Walton (1990) も参照のこと。

ごっこ遊び的な想像の構造はわれわれが文学作品や絵画作品に接するさいの経験にも見いだされる、というのがウォルトンの基本的な着想である。

たとえば小説を読む人は、現実には起こっている事実としては、作者が書き記した一連の文を読んでいる。しかし、読者の側は、それをたんに作者によるストレートな語りとして受け取るのではなく、むしろ、作者とは別人格による（あるいは、そもそも語り手の定かでない）非現実の語りとして受け取る。たとえば、「永いあいだ、私は自分が生れたときの光景を見たことがあると言い張っていた」（三島『仮面の告白』）といった小説内の文は、それがフィクションと見なされているかぎり、作者の独白としてではなく、架空の作中人物の語りで見なされる。このような場合、読者の側の読書経験は、現実には、作者の書いた文章を読むという経験であるが、それが同時に、ある架空の人物の語りを聞いたり、記した手記を読んだりという経験であるかのように想像されている。そのさい、現実の読書経験と想像経験とは、たまたま共存しているということではなく、むしろ、読書経験それ自体が、架空の人物の語りや書記行為であると想像されている。

同じような事情は絵を知覚する場合にも成り立つ。たとえば人物画を見る人は、絵の平らな表面を見ていると同時に、人物の姿を見ている。しかし、人物を見ているといってもそこに現実に人がいるわけではないから、正確には、そこで起こっているのは、一定の風貌の人物を見ているかのような想像だと言わなければならない。しかも、その想像は、たんに絵の表面を見ることをきっかけとして起こるそれとは別個な想像なのではなく、絵の表面を見る知覚経験と不可分に一体化している。つまりこの場合、受け手は、絵の表面の一定の形状を見ているながら、それを見る経験がすなわち一定の風貌の人物を見る経験であるかのように想像しているのである。そして、その人物の口元の特徴をもっとよく見たいと思って眼を近づけると、受け手は現実にはキャンバスの一面に眼を近づけているわけだが、その経験は同時に当の人物の口元に眼を近づける行為であるというふうに理解されているのである。

こうしたウォルトンの理論的枠組みのなかでは、絵による描写・再現の問題は、ごっこ遊び的な想像と融合した知覚経験の問題として説明される。そして、ここで重要なのは、結果的にその説明が、ウォルハイムが援用した二面性を持つ独自の知覚経験というどこか謎めいた印象を残す考え方に関して、より散文的な説明を与えるものであるように見える、という点である。絵の中にさまざまな事物の姿を見るとき、じっさいにはそれらの事物はいま目の前に現実に存在するわけではない。それゆえ、「見る」といっても、本当のところは「見ているかのように想像している」だけだと言わなければならない。ただし、この場合の想像はけっしてたんなる連想や思いつきの類ではなく、あくまで絵の表面の知覚に即し、それと融合した形で営まれるというのがウォルトンの言い分である。

はたしてこうした説明は、ウォルハイム流の二面性を持った知覚という論点を真に発展させたものと見なしていいのだろうか。以下ではその点を、ウォルハイム自身による対応に沿って検討してみることにしたい。

## 5 ウォルハイムの反論

ウォルトンの提案に対するウォルハイムの対応は一貫して否定的である。ひとことで要約すれば、ウォルトン流の理論では、絵による描写・再現ということのもつ知覚的な性格が見失われてしまう、というのがウォルハイムの言い分である。換言すれば、描写・再現の問題は、想像ではなくあくまで知覚の問題なのであり、絵が描写・再現する内容はあくまで絵のもとに「見て」とられるべきものだ、ということになる。こうした評価の一つの表れとして、ウォルハイムは、『芸術としての絵画』では、ウォルトン流のごっこ遊び理論を、グッドマン流の規約主義ともども、描写・再現のもつ知覚的な性格を無視する理論の一つとして位置づけ、批判している。

とはいえ、はたしてウォルトンの理論は描写・再現のもつ知覚的な性格を無視するものなのだろうか。私見では、この点についてウォルハイムの側には基本的な誤解があるように思われる。誤解というのはつまり、ウォルトン流のごっこ遊び理論において問題となる想像を、受け手の側が自覚的・能動的に行う意図的な活動というふうを考える考え方のことである。それはウォルトンが考察の起点においている子供のごっこ遊びの事例を考えるかぎり、無理のない誤解とも言える。というのも、たしかに子供のごっこ遊びの場合には、ごっこの規則は子供の側が恣意的に設定するものであり、場合によっては、遊びが進展する中で自在に変更をこうむることも珍しくないからである。もしも絵の描写内容が、受け手が絵を前にして営むこの種の恣意的な想像によって決定されるのだとすれば、そこからは、絵のもとに「見て」とられる内容という性格は失われざるをえないだろう。むしろ、受け手の側の勝手な想像によって絵の内容がそのつど決められていく、という理屈になりそうである。

しかし、じつはウォルトンは、芸術作品と子供のごっこ遊びの類縁性を強調しながらも、両者における想像のあり方が大きく異なることにも注目している。もちろん、小説や絵画に接する中でわれわれがめぐらせる想像はまったく恣意的なものでありうる。しかし、われわれが小説や絵画の内容を理解するさいに、その理解の営みの不可欠の要素として従事する想像は、けっして恣意的な連想ではなく、むしろ作品そのものの形状やそれを取り巻く社会的な文脈によって「指定され」ている。このように「指定された」想像を実質とすごっこ遊びは、当該作品に関するいわば「公式的」なごっこ遊びに当たる。作品の理解に寄与するのはこうした公式的なごっこ遊びにほかならない。そして、この種のごっこ遊びを構成する想像の多くの部分は、そもそも自覚的に営まれる想像というより、むしろ作品に接するさいにほとんど不可避免的に生じてくる。

ウォルトン流のごっこ遊びの実質を構成するものがこうした多分に受動的でかつ「指定された」想像であることを考慮に入れるならば、そこにおいて描写・再現の持つ知覚的な性格が無視されているという批判は誤解に基づくものといわなければならない。そして、こうした想像に関する誤解を取り去った場合、ウォルハイムの立場とウォルトンの立場はそれほど大きな隔たりがないようにも思われる。むしろ、後者は、前者において謎のまま

---

\*1 Wollheim (1988), pp.76-77.

に残されている二面的な知覚の本性についての啓発的な補足と言えるのではないだろうか。

とはいえ、ウォルハイムは、別のところでは、さらに異なる批判を加えている。

私にとまどうのは、……提案の要点、つまりある知覚経験を別の知覚経験だと想像するということを、どう理解するかについてである。なぜなら、仮にそのようなことが可能だとして、元々の経験はいったいどんな仕方でその内容を維持するのだろうか。というのも、私<sup>1</sup>がその表面を見る経験のことを、それとは異なる経験であるというふうに想像できた<sup>1</sup>とすると、元々の表面を見るという経験には何が残るのだろうか。しかし、もしも私<sup>1</sup>がその場合にも表面を見続けているのだとするならば、あるいはその経験が元々の内容を維持しているのならば、いかにして私は、それが顔を見る経験だと想像することができるのだろうか。

ここでウォルハイムが注目しているのは、絵を見る経験がそこにさまざまな事物の姿を見る経験であると同時に、カンヴァスや紙や壁の平らな表面を見る経験でもあるという事実の意味である。とはいえ、ウォルハイムがここで、その事実をどのような形でウォルトンへの批判に結びつけようとしているのかは、あまり明快ではない。ここでは、問題の事実についてのウォルハイム自身の見解を再確認した上で、それがウォルトンの理論にとってどのような意味をもつかについて考えてみることにしよう。

ウォルハイムの理論では、絵の知覚が物体としての絵の表面を見る経験であるという事実は、それが絵のもとにさまざまな事物の姿を見る経験でもあるという事実と、一体をなしている。これらの事実は、単一の経験の二つの側面だ、というのがウォルハイムの説明である。そして、ウォルハイムがここで単一の経験という点を強調することの一つの意味と考えられるのは、次の事実である。すなわち、絵の表面の形状を見るという経験の内容は、原則的には、絵のもとにさまざまな事物の姿が見られるという事実を離れて、それと独立には、特定することができない、ということである。通常の具象画の場合には、われわれは、絵を見れば、ただちにそこにさまざまな事物の姿を見ないではいられない。そのような描写内容の知識と独立に絵の形状そのものをまさに絵の形状として見るという知覚は、画材の特質に科学的な関心を寄せる研究者のような場合は別とすれば、通常は成り立たない。絵の形状は、通常は、そこにどんな事物の姿が見えるかということと関連づける形でしか特徴付けることができない。それとは別の特徴付けを求めて特殊な見方をするとき（たとえば、故意に通常よりも眼を近づけて絵を見たり、拡大鏡その他の器具を用いて絵を観察したりするとき）には、われわれは、たしかに絵を見てはいるが、しかし、絵との通常につきあい方とは異なる仕方で絵に接している、と言わなければならない。通常<sup>1</sup>の文脈で絵を見ているかぎり、絵画表面の知覚は描写内容の知覚と経験として不可分である。

はたして、こうした二面的な知覚の事実は、ウォルトン流のごっこ遊び理論とは相容れないのだろうか。さきに引用した箇所からすれば、ウォルハイムが《相容れない》とする

---

\*1 Wollheim (2001), p.25.

見方を取っていることはまちがいないと思われる。そして、そのような判断の背景にあると思われるのは、さきにも指摘したように、ウォルハイムが、ウォルトンの場合のごっこ遊び的な想像の働きを、自覚的に営まれる能動的な活動として理解しているという事情である。というのも、もしもウォルトン流の想像を、まず絵の表面が表面として知覚された後に、その知覚の内容をふまえて自覚的・能動的に行われる想像というふうを考えるならば、たしかにウォルトンの理論には、むずかしい説明課題が突きつけられるように思われるからである。第一には、そもそも、ごっこ遊び的な想像にさきだって絵の表面を表面として知覚する経験とは、どのような経験なのか。また、その経験の内容とごっこ遊び的な想像の内容とのあいだにはどのようなつながりがあるのか。そしてさらに、ごっこ遊び的な想像が行われる前と後とで、絵を表面としてみる知覚の内容は変わるのか、変わらないのか——。さきに引用した一節におけるかならずしも明快でない論述において問題とされていると思われるのは、こうした一連の説明課題である。こうした説明課題が生じるのは、ウォルハイムの理解では、絵の知覚が、表面の知覚と、それをふまえた想像というふうに、二段階的なプロセスとして捉えられている結果である。だが、そのような捉え方は事実には反する、というのがウォルハイムの見解である。絵に目を向ければ、ただちにわれわれはそこにさまざまな事物の姿を見ないではいられない。そこで起こっているのはまさに二面性を持った知覚というべきであって、それを知覚経験＋想像というふうに分析するのは不自然である……。

とはいえ、ウォルハイムが難点としてあげる上の一連の説明課題は、はたしてウォルトンの立場から見て本当に問題なのかどうか。先取りして言えば、ウォルハイムの批判は失当だというのが本稿の立場である。とはいえ、この点については節をあらためよう。

## 6 評価

最初に、ウォルトンが想定しているごっこ遊び的な想像の多くが、かならずしも自覚的・能動的な活動ではなく、むしろ作品に接するさいにほとんど否応なく行われる無自覚的・受動的な活動の性格を持つ、という点を再確認しておかなければならない。この点は絵の知覚を考えるさいにはとりわけ重要である。というのも、ウォルトンの理論において絵の知覚経験の重要な成分とされる想像は、その多くの部分がこうした無自覚的・受動的な想像——いわば、絵を見るやただちに発動するような想像——にほかならないからである。

このことの確認は、さきに触れたウォルハイムのウォルトン理解の是非の問題にただちに直結する。ウォルハイムの議論では、ウォルトン理論は、こんなふう捉えられているように見受けられる。つまり、受け手の側はまず絵を絵として（平面上の線や点や色の配列として）見た上で、その知覚された形状をふまえた上で一定のごっこ遊び的な想像を行うのだ、というふうに。しかし、ウォルトンは絵の知覚に関してけっしてこのような時間的順序関係を想定してはいない。例外もあるが、通常の間いわばお行儀のよい具象面を考えるかぎり、それをカンヴァスや紙の表面として見る経験と、それが人物や事物の姿を見る経験であるかのような想像とは、瞬時に同時的に成立する。そして、絵の表面の知覚が同時にこのようなおおかたは無自覚的・受動的に成立する「指定された」想像に浸透されているというという点に絵画知覚の特質を求めようというのが、ウォルトンの見解である。



もちろん、上にも断ったように、例外的と思われる事例もある。さきに触れた粗めの点描画であるとか、ベラスケス流の故意に粗い筆致で描かれた絵の場合、それらを何かの絵として見る通常の絵画知覚が成立する以前の段階で、それがそもそも何かの絵であることに気づかぬまま、たんに平面上の点や線や色の配列を見る、という知覚経験が生じる場合がありうる。さらに言えば、各種の判じ絵のように、その種の効果を意図的に活用した作画法も存在する。この種の絵においては、通常の絵画知覚が生じる前段階として、対象が絵であることに気づかない知覚経験が先立つことになる。そして、その先立つ知覚経験が、その後で成立する絵画知覚のなかでどのように変貌することになるのかという点は、絵による描写・再現の理論にとっては重要な説明課題だと言えるだろう。しかし、それは特にウォルトン理論に固有の問題というわけではなく、ウォルハイム流の理論にとっても同程度に重要な説明課題なのだと言わなければならない。

以上のように考えてくるならば、絵画知覚を二面性を持った独自の知覚とみなすウォルハイムの考え方や、表面の知覚をそれとは異なる知覚であるかのように想像するという想像の構造に絵画知覚の特質を求めるウォルトンの考え方は、誤解を取り去ってみれば、実質的にはそれほど大きく異ならないように思われる。さきにも確認したように、ウォルハイムが絵画知覚の二面性を強調し、かつその二面性があくまで単一の経験の二つの側面であることを力説したのは、絵の表面の知覚の内容が、絵の描写内容の理解と独立には特定できないという事情を顧慮してのことだった。絵の表面がそれ自体としてどのような形状を持っているかという点は、多くの場合、われわれがそれを見るときに、そこにどのような描写内容を見てとるかという事実依存する形で特定される（たとえば、人の眼のような形とか、眉毛のような形というふうに）。このことは、なにも不自然な説明ではなく、むしろ、絵の知覚にかんする基本的な事実の一部と見なされねばならない。それがウォルハイムの二面性理論の基本的なメッセージである。しかし、ウォルトンの理論において、絵画知覚に付随する想像がしばしば無自覚的・受動的であり、かつ作品自体やその文脈によって「指定」されていることが強調されるのもまた、実質的には同じ事情を顧慮してのことだと思われる。どちらの理論も、絵の知覚の特質をどんな事情に求めるかという点では、たいへんに近い関係にあると思われる。

とはいえ、このことを確認した上で、最後にあらためて触れておかなければならないのは、二面的な知覚というウォルハイムの論点が、依然として謎めいた印象を残すことである。絵の知覚が平らな表面の知覚であると同時に事物の知覚としての現象学的性格を持つとしても、絵が、そこに描かれた事物ではないという事実は動かない。だが、絵を見ることで、絵ではない（また多くの場合には実在しない）事物が「見」られるというのは、どういうことなのか。そこにはないもの、実在しないものを、見ることができるのか。

これは部分的には言葉の争いである。「見る」という言い方は、目の前に実在する事物に限定して語られることもあれば、そのような限定なしに語られることもあるのであり、どちらの語り方を優先するかは理論的な都合次第である。だが、そうだとした場合の「見る」が、目の前に実在する事物について語られる場合の「見る」とは意味が異なることは明らかである。そして、ではどのように意味が異なるのか。おそらく、この点についてもっとも自然な説明は、次のようなものである。つまり、いまの場合には、文字どおりの意味で何かが見られているのではなく、たんに、何かが見られているかのよう

な想像が行われているだけだ、と。そして、このことが認められるならば、ごっこ遊び的な想像という概念に依拠したウォルトンの理論が、二面的な知覚に依拠したウォルハイムの説明に対する理論的な補足の性格を持つこともまた、否定すべき理由は見あたらないのである。<sup>\*1</sup>

## 文献

- Clark, K., 1960, *Looking at Pictures*, John Murray.
- Gombrich, E.H., 1960, *Art and Illusion*, Phaidon Press.
- Walton, K.L., 1990, *Mimesis as Make-Believe*, Harvard University Press.
- Walton, K.L., 1992, “Seeing-In and Seeing Fictionally”, J.Hopkins ed. *Psychoanalysis, Mind and Art*, Blackwell, pp.281-291.
- Walton, K.L., 2002, “Depiction, Perception, and Imagination: Responses to Richard Wollheim.” *Journal of Aesthetics and Art Criticism* 60, pp.27-35.
- Wollheim.R, 1980a, *Art and Its Objects*, 2<sup>nd</sup> ed., Cambridge University Press. (first published in 1968.)
- Wollheim,R., 1980b, “Seeing–As, Seeing-In, and Pictorial Representation” , in Wollheim(1980), pp.205-226.
- Wollheim.R, 1886, “Imagination and Pictorial Understanding” , *Proceedings of the Aristotelian Society, Supplement* 60, pp.45-60.
- Wollheim.R, 1988, *Painting as an Art*, Princeton University Press.
- Wollheim.R, 2001, “On Pictorial Representation” , Rob van Gerwen ed. *Richard Wollheim on the Art of Painting*, Cambridge University Press, pp.13-27.

---

\*1 本稿は、拙著『フィクションの哲学』の合評会（第32回「現象学を語る会」、2010年2月20日、於東北大学）のさいに参加者の方々と交わした討議をつうじて浮かんできた着想の一つを、より明確なかたちで展開したものである。考察をさらに展開させるきっかけを与えていただいたことについて、参加者各位に謝意を表したい。